自然讃歌
― 早春の極楽寺山 ―

妹尾 治人

暦の二十四節は、何時誰が定めたものか知らないが、季節の節目を実に正確にとらえている。

今年の正月は、ペルーの人質事件などがあって暗い世相の中で迎えたが、季節はそんなことには関係なく、大寒を越すと立春を迎える。節分は、立春の前夜祭で全国各地で伝統の豆蒔きが行われ、各家庭でもこの日ばかりは隣近所に遠慮なく大声を出して福を呼ぶ。

立春を過ぎた二月十六日（日曜日）、国立公園極楽寺山に早春を探しに登ってみた。先ず、目についたのはニワトコ（別名接骨木）で、国道四三三号から極楽寺・後畑に行く三叉路の左側傾斜地に、早くも若葉の間から花芽を見せているのには驚いた。図鑑を見ると、「最も春早く芽吹く落葉低木で打ち身・くじきの薬とするほか新芽と花は山菜として利用される花は山ブロッコリーと言われる」とある。新芽と花芽を湯がいて食べてみたが、アク抜きが足りなかったのかおいしい物ではなかった。ブロッコリーとは味ではなく形のことであった。

極楽寺への道を登っていくと、氷河礫層がある。その標示板の少し手前の左側にキブシ（木五倍子）が一株だけある。この地点ではまだ雪があるのに、キブシは早春の花で、垂れ下がった花芽ははや黄色に見える。道路の側溝にも使用されている氷河期の石を見ながら雪の道を登って行くと憩の森に着く。オロチ伝説のある蛇の池を廻って見るとアセビ（馬酔木）の花が咲き始めている。シロモジ（白文字）、ツツジ（躑躅）、リョーブ（令法）、コウヤボウキ（高野箒）の芽はふくらんで白く見える。

キャンプ場の東側トイレの横にコブシ（辛夷）が五本植えられている。綿毛をつけた花芽が沢山ついている。コブシの花が多い年は豊作だと言われるが、今年の米はどうだろうか。

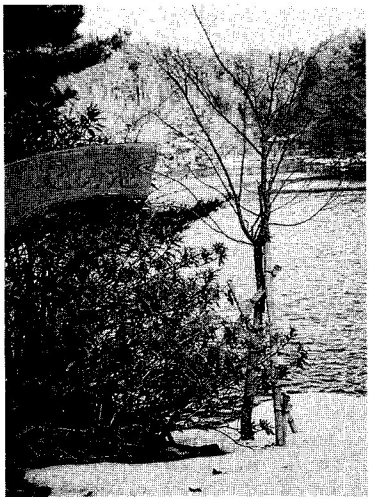
樅の木が一本だけ残されているお寺の駐車場を通り、参道の夫婦樫を左に見て下に降りるとお寺のポンプ小屋がある。そこに珍しいウワミズ桜（上溝桜）がある。幹の直経二十㎝、高さ十五m位の大木が小屋にかぶさっている。ウワミズ桜は、三㎜程の小さな花を総状につけるので桜の花とは思えない。実は六㎜位で赤から黒色に熟し、食べられる。桜は廿日市市の木であり、珍しい野生の桜があることも知って置きたい。

ポンプ小屋から左上に登ると上不見山極楽寺だ。今年は元就ブームで「元就ゆかりの地」の幟が何本も立っている。境内には、読売新聞社が定めた「日本百選」の赤樫がある。石段を降りた所に千本杉があり、地上十五m位のところにムササビの巣穴が見えるのが嬉しい。ムササビは夜活動する。

山門まで降りると道は左右に分かれる。右に二十m程行くと憩の森の標識がある。更に二十m程行き右上の道を登るとお寺の住持墓所がある。無縫塔の前に高野槙が二本植えてあるのが印象的だ。

この辺は原生林のど真中で落ち葉が厚く堆積し、踏み込むと十㎝以上沈む。この落ち葉が、雪解け水をしっかりと貯え市民の飲み水になっている。極楽寺山は、まさに廿日市市の守り神である。

今年の春一番は、二月二十日に確認された。これを境に南風が多くなり啓蟄を迎え、奈良東大寺のお水取が終わると、春は足早にやって来る。春はまさにスプリングだ。生きとし生けるものに躍動の夢と希望を与えてくれる。

春一番 雪解け水に 春を知る

（自然観察指導員）